はぎ

わが待ちし　秋は来りぬ　然れども
芽子が花そも　いまだ咲かずける

（10・二二二三）

（訳）　私の心待ちにしていた秋はついに来たが、ハギの花がまだ咲かないのが残念である。

（用字）芽子・芽・波疑・波義

（和名）はぎ――まめ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）薬用（強壮薬）食用とした　秋の七草の一つ

はじ（やまはぜ）

ひさかたの　天の戸開き　高千穂の
嶽に天降りし　皇祖の　神の御代より　梔弓を
手握り持たし　真鹿児矢を　手挟み添えて……

大伴家持

（20・四四六五）

天岩戸を開いて、高千穂の山に天降ったニニギのミコトと申す皇孫の神様の御代から、大伴氏の先祖のアメのオシオミノミコトが、ハジ弓を手に握り持ち給い、マカゴヤを手に挟んで添え持って……

（用字）梔・波自

（和名）やまはぜ――~~ヤ~~(正)うるし科

（産地）本州・四国・九州

（用途）弓材とした

はちす（はす）

ひさかたの　雨も降らぬか　蓮葉に
渟れる水の　玉にあらむ見む

（16・三八三七）

（訳）（ひさかたの）雨が降ってくれればよいがなあ、ハチスの葉にたまった水が玉になるのを見たいものだ。

（用字）蓮
（和名）はす――はす科
（産地）栽植（原産・アジア）
（用途）根茎を食用とした

はなかつみ（まこも）

をみなへし　佐紀沢に生ふる　花勝見
かつても知らぬ　恋もするかも

中臣女郎

（4・六七五）

（訳）女郎花の咲いている沢に咲くハナカツミのように、曾て経験したこともない恋慕をしている。

（用字）花勝見
（和名）まこも――かほん科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）食用とした

はねず（にわうめ）

念はずと　いひてしものを　唐棣花色の
うつろひ易き　わが心かも

坂上郎女
（4・六五七）

（訳）あなたのことなどは思うまいと申したもののハネズの色のように変りやすい私の心であることよ。
（用字）唐棣花・波禰受・翼酢
（和名）にわうめ――ばら科
（産地）栽植
（用途）果実を食用や染料とした

ははそ（こなら）

山科の　石田の小野の　柞原
見つつや君が　山路越ゆらむ

藤原宇合
（9・一七三〇）

（訳）山科の石田の小野にあるハハソの林を見ながら、いとしい君がその山路を越えて旅をつづけているだろうか。
（用字）柞・母蘇・波播蘇・波々蘇
（和名）こなら――ぶな科
（産地）北海道・本州・四国・九州

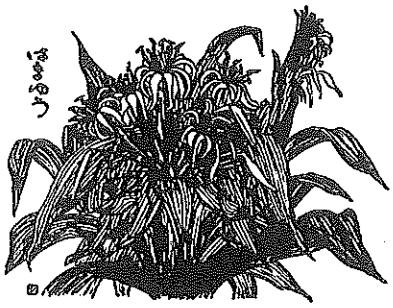
はまゆう（はまおもと）

み熊野の　浦の浜木綿　百重なす
心は念へど　直に逢はぬかも

柿本人麻呂
（4・四九六）

（訳）　み熊野の浦に生えているハマユウの葉が幾重にもなっているように、頻りにあなたを思っているが、心が届かないのか、どうしてもあうことができない。

（用字）浜木綿
（和名）はまおもと・はまゆう――ひがんばな科
（産地）本州・四国・九州



はり（はんのき）

引馬野に　にほふ榛原　入り乱り
衣にほはせ　旅のしるしに

長忌寸奥麿
（1・五七）

（訳）　引馬野に美しく咲いているハリの木林に自由に入って、ここへ来た旅行記念に衣を染めなさい。

（用字）榛・針・波里
（和名）はんのき――かばのき科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）木材とした　実は黒色染料とした

ひ（ひのき）

いにしへに　ありけむ人も　わが如か
三輪の桧原に　挿頭折りけむ

柿本人麿
（7・一二八）

（訳）古い時代の人たちも、今の私のように、三輪山のヒノキで挿頭にしたのであろうか。
（用字）桧
（和名）ひのき――ひのき科
（産地）本州・四国・九州
（用途）優良建築材とした

ひえ（のびえ）

打つ田に　稗は数多に　ありといへど
択えし我ぞ　夜ひとり宿る

（11・二四七五）

（訳）耕した田にヒエがたくさん生えたが、その中から択（え）り捨てられた私だけは、夜独り淋しく寝ているよ。
（用字）稗・比要
（和名）のびえ――かほん科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（その他）野生のヒエで、食用には、ならない

ひかげかづら（ひかげのかづら）

あしひきの　山下日蔭　蘰ける
上にや更に　梅を賞はむ

大伴家持
（19・四二七八）

（訳）（あしひきの）山の下かげに生えているヒカゲカズラを頭に結んで遊んでいる上に、どうして更に梅を挿すようなことをしようか。

（用字）日蔭蘰・日蔭加都良
（和名）ひかげのかづら――ひかげのかづら科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）胞子を石松子といい薬用とする

ひさぎ（あかめがしわ）

ぬば玉の　夜のふけゆけば　久木生ふる
清き河原に　千鳥しばなく

山部赤人
（6・九二五）

（訳）（ぬば玉の）夜がふけていくと、昼間見たヒサギの生えているきれいな河原に千鳥のしきりに鳴く声が聞こえる。

（用字）久木・歴木
（和名）あかめがしわ――たかとうだい科
（産地）本州・四国・九州
（用途）葉はかしわの葉の代用にされた

ひし

君がため　浮沼の池の　菱採むと
我が染めし袖　濡れにけるかも

柿本人麿
（7・一二四九）

（訳）　あなたのために、泥深い沼で、ヒシの実を採ろうとして、私が自分で染めた袖をぬらしてしまった。

（用字）菱
（和名）ひし――あかばな科
（産地）本州・四国・九州
（用途）実は食用とした

ひめゆり

夏の野の　繁みに咲ける　姫百合の
知らえぬ恋は　苦しきものを

大伴坂上郎女
（8・一五〇〇）

（訳）　夏野の繁みに咲いているヒメユリのように、人に知られない恋は苦しいものである。

（用字）姫由理
（和名）ひめゆり――ゆり科
（産地）本州・四国・九州
（その他）かれんな花として愛された

ひる（のびる）

醤酢に　蒜搗き合へて　鯛願ふ
吾になる見せそ　水葱の羹

長忌寸意吉麿
（16・三八二九）

（訳）醤と酢にヒルをつきこんであえ物とし、鯛を求めている私に見せないでくれ。水葱のあつ物なんて。

（用字）蒜

（和名）のびる――ゆり科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）ネギの仲間で、ネギのような臭気があり、食用とした

ふぢ（ふじ）

恋ひしけば　形見にせむと　わがやどに
植ゑし藤浪　いま咲きにけり

山部赤人
（8・一四七一）

（訳）恋しい折は、形見として見て下さいとうちの庭に植えたフジが今は咲きさかって、波のようにゆらいでいる。

（用字）藤、敷治

（和名）ふじ――まめ科

（産地）本州・九州

（用途）樹皮の繊維は上代衣服原料

ふぢばかま（ふじばかま）

萩が花　尾花くず花　なでしこの花　女郎花
また藤袴　あさがほの花

山上憶良
（8・一五三八）

（訳）秋の七草は、萩・すすき・なでしこ・女郎花それにフジバカマとあさがおの花である。

（用字）藤袴
（和名）ふじばかま――きく科
（産地）本州・四国
（用途）この葉が生乾きすると佳香を発する　薬用とした

ほほがしわ（ほおのき）

わが夫子が　捧げて持てる　厚朴
あたかも似るか　青き蓋

僧恵行
（19・四二〇四）

（訳）わが君が捧げ持っているホオガシワは、青いきぬ笠によく似ているよ。

（用字）厚朴・保宝我之波・保宝我之姿
（和名）ほおのき――もくれん科
（産地）北海道・本州・九州
（用途）木材として利用が多く、薬用にもされた

ほ　よ（やどりぎ）

あしひきの　山の木末の　寄生取りて
挿頭しつらくは　千年寿ぐとぞ

大伴家持
（18・四一三六）

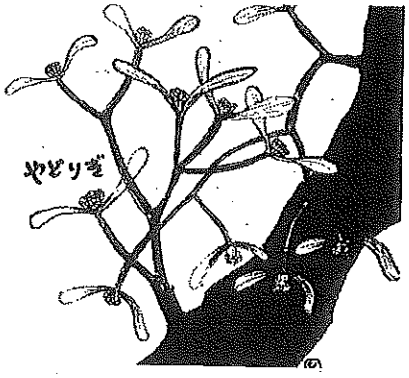
（訳）（あしひきの）山の木の上の方に寄生するホヨを採り頭にさすのは千代の命を願うためである。

（用字）寄生・保与

（和名）やどりぎ――やどりぎ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（特徴）普通は、えのきに寄生し、けやき・くり・さくらなどの枝の上にもつく



ま　き（すぎ・ひのき類）

真木柱　太き心は　有りしかど
この吾が心　しづめかねつも

舎人
（2・一九〇）

（訳）マキ柱のように、太く逞しい心は持っていたが、御主人を喪った悲しみは、抑えようとしても抑えきれない。

（用字）真木

（和名）ひのき――ひのき科
すぎ――すぎ科

（産地）本州・四国・九州

（用途）優良建築材とした

まつ

一つ松　いく代か歴ぬる　吹く風の
こゑの清きは　年深みかも

市原王
（6・一〇四二）

（訳）この一本松はどれだけ年を経たのだろうか。マツ吹く風のさわやかなのは、長い年を経たためだろう。

（用字）松・待・麻都

（和名）まつ・あかまつ・くろまつ――まつ科

（産地）本州・四国・九州

（用途）古来百樹の王として賞された。建築材とした

まめ（やぶまめ）

道の辺の　うまらの末に　はほ豆の
からまる君を　離れか行かむ

防人の歌
（20・四三五二）

（訳）道わきの茨の先に、まきついているマメのように、取りつく彼女に別れて行くのであろうか。

（用字）麻米・豆

（和名）やぶまめ・のまめ・つるまめ――まめ科

（産地）本州・四国・九州

（その他）普通マメといっているのは大豆のことで、この歌に出るマメはヤブマメで、食用にならない

まゆみ

南渕の　細川山に　たつまゆみ
弓束まくまで　人に知らえじ

（7・一三三〇）

（訳）　南渕の細川山に生えているマユミで作る弓に、握りを巻きおえるまでは、二人のことは人に知られないようにしよう。

（用字）真弓・檀
（和名）まゆみ――にしきぎ科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）弓材とした

みつながしは（かくれみの）

…皇后紀伊国に遊行し　熊野岬に到り
その処の御綱葉を取りて　還り給ひき…

（2・九〇）後書

（訳）　あとがきの一部に付き省略
（用字）御綱葉
（和名）かくれみの――うらぼし科
（産地）本州（中部以西）

む　ぎ（おおむぎ）

馬柵越しに　麦喰む駒の　詈らゆれど
なほし恋しく　思ひかてなく

（12・三〇九六）

（訳）牧場の柵ごしに、ムギを食べる駒が叱られるように、親に叱られるけれど、やはり恋しさがつのって、じっとしていることができない。

（用字）麦・武芸・牟伎
（和名）おおむぎ――かほん科
（産地）栽植（原産・西部アジア）
（用途）食用とした

む ぐ ら（かなむぐら）

思ふ人　来むと知りせば　八重葎
おほ~~を~~(正)へる庭に　珠敷かましを

（11・二八二四）

（訳）いとしいあなたがおいでになることがあらかじめわかっていたならば、八重ムグラのはびこっているこの庭に珠をしいておくのだったのに。

（用字）葎・六倉・牟具良
（和名）かなむぐら――くわ科
（産地）北海道・本州・四国・九州

むろのき（ねず）

吾妹子が　見し鞆の浦の　むろの木は
常世にあれど　見し人ぞなき

大伴旅人
（3・四四六）

（訳）妻が見た鞆の浦のムロノキはいささかも変りがないのに、往路では共に見た妻は、他界して今はこの世にいない。

（用字）室乃樹・牟漏能木・天木香樹

（和名）ねず・むろ・もろ――ひのき科

（産地）北海道・本州

（用途）果実を乾燥させ薬用にした（利尿薬）

むらさき

あかねさす　紫野行き　標野行き
野守は見ずや　君が袖振る

額田王
（1・二〇）

（訳）禁示のしめを張ってあるムラサキ野を行くと、あちらで君が袖を振っておいでになるが、野番は見ていないかしら。

（用字）紫・紫草・牟良佐伎

（和名）むらさき――むらさき科

（産地）北海道・本州・四国九州

（用途）根を薬用（火傷・凍傷・水泡の妙薬）にしたり、紫色の染料とした

もむにれ（はるにれ あきにれ）

…この片山の　もむ楡を　五百枝剝ぎ垂り
天光るや　日の気に干し

乞食者の詠
（16・三八八六）

（訳）　片山のモムニレの皮を沢山はいでたらし（天照るや）
日光に乾かし。
放浪者の作――長歌

（用字）毛武爾礼
（和名）にれ・はるにれ・あきにれ――にれ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）樹皮を薬用や食用とした

も

春の苑　くれなゐにほふ　桃の花
下照る道に　出で立つをとめ

大伴家持
（19・四一三九）

（訳）　春の庭が紅にぱっと輝いている。モモの花が明るく
照らしている道をそぞろ歩きをしている少女たち。
まことに美しく絵のようである。

（用字）桃
（和名）もも――ばら科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）果実を食用とした

ももよぐさ（つゆくさ）

父母が　殿の後方の　ももよ草
百代いでませ　我が来たるまで

（20・四三二六）

（訳）　お邸のうしろにあるモモヨ草のように、いつまでもお健やかにおいで下さい。私が戻ってくるまで。

（和名）つゆくさ――つゆくさ科

（産地）北海道・本州・四国

（用途）花を染料とした

やなぎ（しだれやなぎ）

浅緑　染めかけたりと　見るまでに
春の楊は　萌えにけるかも

（10・一八四七）

（訳）　浅緑の色に染めた布を掛けてあるのではないかと見まちがうほどに、ヤナギが芽ぶいてきた。

（用字）柳・楊・也奈宜・楊奈疑

（和名）しだれやなぎ――やなぎ科

（産地）栽植（原産・北部アジア）

（用途）建築材・器具材とした

やまあゐ（やまあい）

級照る　片足羽河の
さ丹塗の　大橋の上ゆ　くれなゐの
赤裳裾引き　山藍用ち
摺れる衣着て　ただ独り……

（9・一七四二）

（訳）（級照る）片足羽川の赤く塗った大橋の上に、赤裳裾を引き、ヤマアイで染めた着物を着てただ独り…

（用字）山藍
（和名）やまあい―とうだいぐさ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）山藍摺りの青色の染料に用いた

やますげ（じゃのひげ）

あしひきの　山菅の根の　ねもころに
止まず念はば　妹に逢はむかも

（12・三〇五三）

（訳）（あしひきのヤマスゲの根の）ように一生けんめいに絶えず恋い慕っていたら彼女に会うことができようかしら。

（用字）山菅・山草・夜麻須気・夜麻須我
（和名）じゃのひげ――ゆり科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）根の塊状部を薬用とした

やまたちばな（やぶこうじ）

紫の　糸をぞわが搓る　あしひきの
山たちばなを　貫かむと念ひて

大伴家持
（7・一三四〇）

（訳）　紫の糸を今よっている。ヤマタチバナを糸に通そうと思って。

（用字）山橘・夜麻多知波奈

（和名）やぶこうじ――やぶこうじ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）根を薬用とした

やまたづ（にわとこ）

君が行き　日長くなりぬ　山多豆の
迎へを行かむ　待つには待たじ

盤姫皇后
（2・九〇）

（訳）　天皇の御旅行が長くなった（ヤマタヅの）お迎えに行こうか、このまま待っていられないので。

（用字）山多豆・山多頭

（和名）にわとこ――すいかずら科

（産地）本州・四国・九州

（用途）花を乾燥・発汗・利尿薬・また打撲症に煎剤汁を外用する

やまぶき

蝦なく　甘南備河に　かげ見えて
今か咲くらむ　山ぶきの花

厚見王
（8・一四三五）

（訳）河鹿の鳴く、神南備川に影をうつして、今日この頃はヤマブキが咲いていることだろう。
（用字）山吹・山振・夜万夫吉・夜麻夫枳・也麻夫支
（和名）やまぶき――ばら科
（産地）北海道・本州・四国・九州

ゆづるは（ゆずりは）

いにしへに　恋ふる鳥かも　ゆづるはの
御井の上より　鳴きわたり行く

弓削皇子
（2・一一一）

（訳）昔をなつかしんでいる鳥かしら、ユズルハのおおっている御井のあたりを鳴きすぎて行った。
（用字）由豆流波・弓絃葉
（和名）ゆずりは――とうだいぐさ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）葉もしくは樹皮の煎汁を駆虫薬とする（民間薬）

ゆり（やまゆり）

筑波嶺の　さ百合の花の　夜床にも
愛しけ妹ぞ　昼もかなしけ

（20・四三六九）

（訳）筑波山に生えているユリのように、夜床でもいとしい彼女は、昼もかわいい。

（用字）百合・由利

（和名）やまゆり――ゆり科

（産地）北海道・本州

（用途）球根を食用とした

よもぎ

大君の任のまにまに
……ほととぎす来鳴く　五月の菖蒲草
よもぎ蘰き　酒宴遊び慰れど

大伴家持

（18・四一一六）

（訳）天子さまのいいつけに従って…時鳥が来て啼く五月に咲く菖蒲やヨモギをかずらにし、酒盛をして音楽をし心を慰めるが。

（用字）余母疑

（和名）よもぎ――きく科

（産地）本州・四国・九州

（用途）草餅の材料など食用としたり、モグサなど作り薬用とした

わすれぐさ（やぶかんぞう）

萱草　吾が下紐に　著けたれど
醜の醜草　言にしありけり

大伴家持
（4・七二七）

（訳）恋の苦しさをも忘れるといわれているワスレグサを下紐につけてはみたが、このバカめが、一向に効きめがない。言葉だけのことであった。

（用字）萱草・忘草
（和名）やぶかんぞう――ゆり科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）若葉を食用とした

わらび

石激る　垂水の上の　さ蕨の
萌え出づる春に　なりにけるかも

志貴皇子
（8・一四八四）

（訳）石の上を激しく去り流れる滝のほとりの、ワラビが芽を出す春になったよ。

（用字）和良妣
（和名）わらび――うらぼし科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）食用野草として早くから知られ、芽出しばかりでなく、根を掘ってワラビ粉をつくり、これでワラビ餅を作った

ゑぐ（くろぐわい）

君がため　山田の沢に　ゑぐ採むと
雪消の水に　裳の裾ぬれぬ

（10・一八三九）

（訳）あなたにあげようと、山田の沢でエグを採ろうとして、折からの雪解けの水に裳裾（今のスカート）がぬれてしまった。

（用字）恵具・回具
（和名）くろぐわい――かやつりぐさ科
（産地）本州・四国・九州
（用途）塊茎の肉は白色で食用とされた

をぎ（おぎ）

神風の　伊勢の浜荻　折り伏せて
旅宿やすらむ　荒き浜辺に

碁檀越

（4・五〇〇）

（訳）（神風の）伊勢の浜オギを折りしいて、旅寝をなさっておいでになるのではなかろうか、波風の荒い海岸に。

（用字）荻・乎疑
（和名）おぎ――かほん科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）茎葉は屋根材・茎でスダレをつくる

をみなへし（おみなえし）

手に取れば　袖さへにほふ　女郎花
この白露に　散らまく惜しも

（10・二一一五）

（訳）　手に取ると花の黄色が袖を明るくするオミナエシがこの白露のために散るが惜しい。

（用字）女郎花・佳人部為・姫部思・美人部師・乎美奈敝之

（和名）おみなえし――おみなえし科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）秋の七草の一つ